

Battle of TOBRUK



トブルク陥落

✦自滅するイギリス軍

1942年5月26日に開始されたトブルク攻略作戦（暗号名ベネチア作戦）は、ガザラ・ボックスの戦いまたは大釜の戦いと呼ばれる前哨戦により幕を開けた。

この戦いは、当初イギリス軍の物量とビル・ハケイムの保塁に立てこもり頑強な抵抗を続けるフランス外人部隊の善戦と相まって、ドイツ・アフリカ軍も大苦境に陥ったが、軍司令官エルヴィン・ロンメル上級大将の優れた作戦能力、そしてドイツ軍将兵個々の卓越した力量によりこれを克服、完全な勝利を収めることができた。

イギリス第8軍司令官サー・ネイル・リッチー中將は、戦線遙か後方のガンプートの司令部から指揮をとっていたため、瞬時にして状況が変化する第一線の情勢が把握できず、6月12日のエル・アデムにおける戦車戦において、イギリス第1装甲師団の第4および第22装甲旅団を別個に戦線へ投入するよう命じた結果、13日の昼までに戦車138輦が撃破され、事実上師団は壊滅してしまった。

一方、北部ガザラ・ラインを防衛していたイギリス第

50歩兵師団は、翌14日に包囲網の最も脆弱な部分、すなわちイタリア第10軍団の真った中を急襲突破することにより、南方のビル・ハケイムを迂回して包囲網から脱出することに成功した。

ロンメルは、兵力の絶対的不足から、これを完全に包囲して撃滅することはできなかったが、彼の優れた作戦能力により、ドイツ軍を大勝利に導くことができた。

この結果、イギリス軍がトブルク防衛に使用できる虎の子的存在である戦車戦力は、兵力の消耗が著しい2コ戦車大隊を残すのみとなった。

また地雷をはじめ、トブルク防衛に必要な資材は、総てガザラ・ライン構築のために使い尽くされてしまっていたので、十分な防衛陣地の構築はいうにおよばず、現状の掩蔽部の補修工事にさえ不足するありさまであった。

トブルクの防衛に当たる部隊は、第2南アフリカ師団（第4南アフリカ旅団、第6南アフリカ旅団）を中心に、イギリス第1装甲師団第201近衛歩兵旅団のコールドストリーム近衛連隊第3大隊、第5インド歩兵師団第11インド歩兵旅団のカメロン・ハイランダーズ連隊第2大隊

北アフリカにおけるドイツ・アフリカ軍団とイギリス連邦軍は各地で激戦を繰り広げたが、その数多い闘いのなかで大きな転機の一つとなったのがトブルクを巡る闘いであった。2度にわたるトブルク攻防戦はアフリカ軍団の勝利におわったものの、以後ドイツ軍は行足を止められ、勝敗を決定するエルアラメインの攻防へと舞台は移る。トブルク攻防戦はアフリカ軍団敗北へのプレリュードであったのかもしれない。



伊達博昭

およびグルカ小銃連隊第2大隊・第7大隊、マハラタ連隊第2大隊・第5大隊、シャーウッド・フェスター連隊第11大隊、ウースターシャー連隊第1大隊、第32装甲旅団ロイヤル戦車連隊第4大隊・第7大隊、第4重高射砲連隊といった、まさに寄せ集めの敗残部隊であり、総兵力こそ35,000名を数えたが、肝心のハードウェア、すなわち戦車戦力はバレンタイン歩兵戦車を63輛保有するのみで、火砲にいたっては400門こそここというお粗末な内容であった。

さらに、何よりも大切な要素である兵員個々の士気については、かつてないほどの沈滞ぶりであった。

このような敵の状況を、ロンメルは適確に見抜いており、今こそ間髪を入れず攻撃を加えれば、一挙にトブルクを攻略することができ、さらにまた、エジプト進攻作戦が早急に実施できるものと考えていた。

＋包囲完了

これまでの戦いで、ドイツ・イタリア両軍共に疲れ切っていたが、最も大切なことは動揺する敵に立ち直るきつ

かけを与えることなく、これを撃滅することであったことから、ロンメルは、15日には指揮下各部隊に対して、間髪を入れずトブルクに向かって進撃を開始するよう命じた。

併せて、機甲軍がトブルクを素通りしてエジプト国境へ進撃するよう見せかけるため、偽の電文を発信すると共に、部隊を一時エジプト国境に向かわせるといった偽装工作を実施して、イギリス軍情報部の判断に迷いが生じるよう仕向けた。

すなわち、ドイツ・アフリカ軍団の主力（第15機甲師団・第21機甲師団）、イタリア第20機械化軍団の全兵力（アリエテ機甲師団・トリエステ自動車化師団）をトブルク南西に待機させ、第90軽機械化師団をトブルクの東方約120kmの地点にあるエジプト国境のバルディアに向かわせることにより、陽動作戦を行なうと共に、敵のトブルク防衛部隊とトブルク救援部隊との遮断を狙った作戦を立てたのである。

一方、カイロの中東方面イギリス軍総司令部内では、中東方面軍総司令官サー・クロード・オーキンレック大將をはじめ、リッチー等主要指揮官達が長々とトブルクの防衛とエジプトにおける反撃作戦についての討議を行なっている間、具体的措置は何も実施されないという状況が続いていた。

上級司令部がこのような不始末であったから、前線司令部においては、組織的な反撃体制がとれるべくもなく、部分的には若干の抵抗拠点において散発的な反撃を試みたものの、攻撃に鋭さは全くなく、いたずらに損害が増ガザラ・ボックスの戦いでは英軍も善戦した





トブルクをめざして進撃する第21機甲師団所属のⅢ号指揮戦車

すばかりであった。

17日にはトブルク包囲網は絞られつつあり、午後3時、ロンメルは第15機甲師団、第21機甲師団、アリエテ機甲師団、トリエステ自動車化師団に対してトブルク東方に向かって移動を開始するよう命令した。

トブルク包囲網の総仕上げとして、アフリカ軍団の偵察大隊がトブルク防衛の外郭陣地の南部を大きく迂回して18日の未明には西の海岸線に達した。ロンメルは午前8時5分に陸軍総司令部および南方軍総司令部官アルベルト・ケッセルリング空軍元帥に、トブルクの包囲が完了したことを無線で報告した。

✦1942年6月、トブルク前面

このような結果、イギリス空軍はガンブットの飛行場を放棄せざるを得なくなり、ドイツ軍に対して全く航空攻撃を実施することができなくなった。

ロンメルは、ハティアンに設置した新しい司令部にドイツ第8軍傘下の装甲師団に配備されたクルーセイダー巡航戦車

イギリス第10航空軍司令官のホフマン・フォン・ヴァルダウ大将を呼び、トブルク攻撃の初期段階に空軍のとりべき作戦について話し合った。

彼は、事前に実施した威力偵察の情報収集の結果に基づき、トブルク周辺に存在する敵の防禦陣地の内で、とくに強力なR49からR71という目標番号を付けた特定の拠点に、午前5時20分から急降下爆撃機をもって最大限の攻撃を加えるよう、フォン・ヴァルダウに対して要請した。

地上部隊による攻撃は20日と定められ、陸軍と空軍の間の無線通信のための周波数が決定され、地上攻撃用の地図と航空攻撃用の地図が交換された。

そして爆撃に先立ち、各砲兵部隊は、空軍機が上空に飛来すると同時に発煙弾を発射して、空軍の攻撃目標を示すことが決定された。

19日の昼に、ケッセルリングがロンメルの司令部にやって来て、ロンメルのトブルク攻略計画を認可した。

同日の夜中には、陽動作戦を実施していた第90軽機械



化師団はバルディアの占領を完了し、トブルクに対するイギリス軍の救援部隊を遮断する態勢が整った。

トブルク攻略作戦の計画は、前年11月のクルーセイダー作戦時に、ロンメル自らが作成したトブルク攻略計画をほぼ全面的に使用することで間に合ったので、作戦主任参謀のジークフリート・ヴェストファール大佐は、ロンメルの指示する日時を計画書に記入のうえ、命令文を起草するだけでよかった。

ロンメルは、奇襲攻撃の定石どおり、攻撃前日までに実施すべき出撃線への兵力展開、そして威力偵察、準備砲撃も最小限に留めた。同時にまた、トブルク攻略後におけるエジプト進攻作戦に備えて、戦車戦力の温存を図りたいという考慮から、要塞攻撃に戦車を前面に投入することは、あまりにもリスクが大きいと考えていた。

従って、トブルクおよびトブルク外郭陣地への攻撃部隊からは、戦車部隊の前面投入を要求してきたが、彼はこの要請を却下した。

とくにトブルク外郭陣地への攻撃に当たっては、砲兵と空軍の支援を受けた突撃工兵による各拠点の組織的破壊を先陣として、歩兵を中心とした白兵戦による浸透作戦計画を彼自ら立案していた。

先のビル・ハケイム攻略において、絶えず実施される急降下爆撃機の攻撃による、敵の物質的・心理的両面に与えるダメージの威力を十分に認識していたケッセルリ



劣勢のアフリカ軍団を率いた智将ロンメル將軍

ングは、ロンメルの攻撃計画案に全面的に賛同し、地中海戦域の全空軍兵力をこの攻撃のために呼び寄せる命令を出していた。

戦車不足に苦しむアフリカ軍団は、捕獲した英軍車輛を積極的に使用した





トブルクを包囲したアフリカ軍団は一気に敵の防衛線を突破してわずか1日で勝利をおさめた

この結果、トブルク攻略作戦に投入される枢軸軍航空戦力は、これまでの北アフリカ戦では最大規模のものとなり、クレタ島からの増援機などによる150機の爆撃機をふくむ1日延べ600機におよぶ航空攻撃が、トブルクに対して実施されることになった。

航空攻撃の重点は、ロンメル の 作戦計画に基づき、ドイツ軍の突入口となるトブルク外郭線の南東部分に重点が置かれることになった。ここには、第5インド歩兵師団第11インド歩兵旅団のカメロン・ハイランダーズ連隊

第2大隊およびグルカ小銃連隊第2大隊・第7大隊、マハラタ連隊第2大隊・第5大隊が守る狭い戦線であり、ここに陸・空一体となった全攻撃の圧力が加えられることになった。

同時にイタリア第20機械化軍団が、とくに重点地域とされたカメロン・ハイランダーズ連隊第2大隊に対して正面より波状攻撃を加えることにより、突破口の拡大を支援することになった。

十栄光の勝利

20日午前2時、ロンメルは戦闘指揮所に入り、午前3時30分には各機甲師団が予定の攻撃開始線に配置を完了したという報告を受けた。午前5時30分、1分の狂いもなくドイツ・イタリア軍の砲撃が開始され、午前6時ちょうどには、トブルク上空に戦闘機に護衛された爆撃機編隊が飛来した。やがて急降下爆撃機は、編隊から離れると次々と目標に向かって急降下を開始した。

この間、敵の高射砲や戦闘機による反撃は一切行われず、総ての掩蔽部に対して正確な爆撃が行なわれた。

午前7時、攻撃部隊の総ての小・中隊長が立ち上がり、攻撃開始の号笛を吹き鳴らすと、突撃工兵達は各陣地の前に掘られた対戦車壕への架橋と、各拠点の爆破攻撃を開始した。歩兵は前方を煙幕で覆われながら次々と塹壕内に突撃を開始し、白兵戦によりグルカ兵達をことごとくなぎ倒し、戦車の突入路を確保することに成功。7時55分には戦車がトブルク市内に侵入を開始した。

午前8時30分、第15機甲師団の先頭の戦車が市内に突入した時には、すでに勝利の兆候は明らかになりつつあり、午前9時には、ロンメルは勝利を確信し、従軍記者が持っているマイクに向かってドイツ本国のラジオで放送する声明を吹き込んだ。そして、オートバイ伝令がそのレコードを受領すると飛行場へ届け、その晩放送するためにベルリンに向けて空輸された。

午後2時45分に、グスタフ・フォン・ビスマルク少将の指揮する第21機甲師団の戦車部隊は、トブルク港を一望できる地点を攻略し、砲兵部隊がそこから港に対する

トブルク攻略戦における ドイツアフリカ軍団の編成 (連隊規模以下は省略)

軍団司令部	第33砲兵連隊
アフリカ機甲軍	
第21機甲師団	第90軽師団
師団司令部	師団司令部
第5戦車連隊	第361アフリカ歩兵連隊
第104狙撃兵連隊	第155狙撃兵連隊
第155砲兵連隊	第200軽歩兵連隊
第47機甲擲弾兵連隊	第190砲兵連隊
第15機甲師団	第164軽師団(自動車化)
師団司令部	第125歩兵連隊
第8戦車連隊	第382機甲擲弾兵連隊
第104狙撃兵連隊	第433機甲擲弾兵連隊
第115狙撃兵連隊	第220砲兵連隊
第200狙撃兵連隊	

トブルク攻略における イタリア軍の編成

第20自動車化軍団	ブレシア歩兵師団
アリエテ機甲師団	
トリエステ自動車化師団	第21歩兵師団
	バビア歩兵師団
第10歩兵軍団	トレント歩兵師団
ボロニア歩兵師団	サブラタ歩兵師団

砲撃を開始した。午後7時には、戦車部隊がトブルク港に突入、ピラストリノおよびソラノの2つの堡壘を攻略し、事実上トブルクの攻略は完了した。

翌21日、日の出と共にロンメルはトブルク市街に車で入ると、トブルク守備部隊の諸隊の降伏が続いている最中であった。

午前9時40分、ロンメルはトブルク西方の海岸道上において、トブルク要塞司令官兼第2南アフリカ師団長H・B・クロッパ少将の降伏を受理した。こうしてトブルクは陥落し、捕虜となったイギリス軍の将兵は、33,000名にのぼった。ロンメルは、陸軍総司令部宛にトブルク要塞全体が降伏し、将官若干名をふくむ多数の捕虜を得たと打電した。

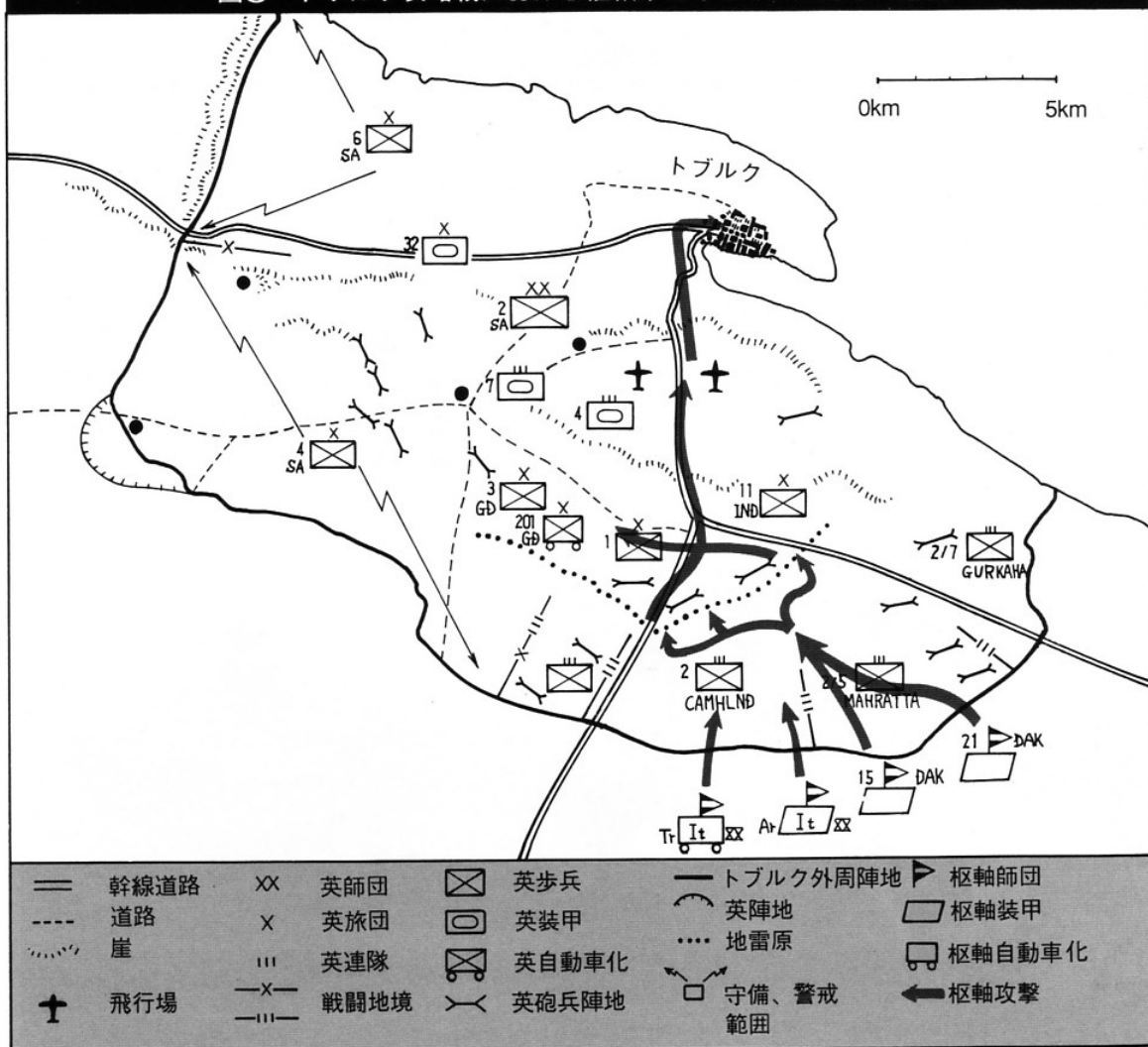
同日の昼にケッセルリングがロンメルのもとへやって

来て、トブルク攻略の祝辞を述べると共に、8月に予定されているマルタ島攻略作戦に、空軍の全力を転用することを通告したが、ロンメルはエジプト進攻作戦を強く主張し、ケッセルリングに対してエジプト攻略後にマルタ島攻略作戦を実施するよう進言した。

実際のところ、ロンメルとしてはケッセルリングがどう思っているかが、これを全く無視するつもりであった。

ドイツ総統アドルフ・ヒトラーから絶大の支持と信頼を受けており、そして、これまでも常に総統直属の立場をとり続けてきた彼は、これに先立ち、ヨゼフ・ゲッペルス宣伝相の首席副官兼顧問であり、ナチス党派遣のロンメル付副官アルフレート・ベルント大尉に、エジプト進攻の許可を求めたヒトラー宛の書簡を持たせて、ベルリンに派遣していたのであった。

図①：トブルク攻略戦における枢軸軍とイギリス連邦軍の配置





トブルクへの攻撃を前にして待機するアフリカ軍団の将兵。車輛はSdkfz.251/6でペナントから旅団本部車輛である

ドイツ本国では、拡大する第三帝国の勢力の頂点として、ロンメルがトブルク攻略は国をあげて宣伝され、まさに第三帝国の絶頂期を示すものとなっていた。

しかしロンメルは、過去幾多の枢軸軍將兵の命を奪ったこの要塞の攻略は、エジプト進攻により、中東全イギリス軍を撃滅するという最終目的の一通過点に過ぎないと判断していた。

敗れたとはいえ、中東のイギリス軍勢力はいまだ強大であり、また、これまでの原則どおり、砂漠の戦いでは敵のハードウェア、すなわち兵力そのものの完全な撃滅トブルク近くでスタックしたと思われるSdkfz.263を引き上げるⅢ号指揮戦車

をなくしては、勝利はあり得ないものと認識していた。

イギリスのBBC放送が、ロンメルがトブルクを攻略することなど不可能と放送中の午後4時、ロンメルは、フォン・ビスマルクに対して第21機甲師団の全兵力でもって、エジプト国境へ向かって進撃するよう命じた。

✦補給の落とし穴

ロンメルは、過去の経験からしても、エジプトに近づけば近づくほど、自軍の補給線が脆弱なものとなり、逆にイギリス軍の補給線が強固なものになることを認識し





トブルクに入城したアフリカ軍団所属の患者輸送型ホルヒ重スタッフカー

ていた。また、イギリスにとって北アフリカは、当面の間唯一の戦場となっており、極東戦域を犠牲にしても大英帝国全体をあげて砂漠の戦いに取り組んでいることも理解していた。そして、彼が率いるわずか2コ機甲師団と1コ自動車化師団のドイツ軍に対して、実に22コ師団の英連邦各師団が対峙していることも、彼には既知の事実であった。

一方、補給面に関しては、トブルク攻略に空軍の全兵力を集中したことにより、マルタ島が息を吹き返しつつあり、とくにイタリア海軍の護送船舶用のガソリンが不足し始めていた。このことは、ロンメルに対する補給量の減少に直接影響が出始め、毎月150,000 t ずつリビアに到着していた補給物資が、わずか32,000 t に減少する結果となった。

マルタ島が健在である限り、敵の攻撃をかわすために、

イタリアのナポリより出航する輸送船舶は総てトリポリに入港するため、トブルクの前線にはトリポリ街道をトラックで輸送する手段をとらなければならなかった。

このことは、トリポリからトブルクまでの間、片道約2000km、往復約4000kmの走破を意味していた。

このような長距離を頻繁に往来する場合、砂漠のような劣悪な環境では、トラックのエンジンそのものの寿命が短くなり、さらに敵の航空攻撃もしくは地上戦闘に巻き込まれるため、その数は常に不足がちであった。しかしながら、機甲軍の輸送用に割り当てられているトラックの数量は、東部戦線の同規模の軍団に割り当てられている輸送用トラックの数量300台の実に10倍に当たる3000台もの数に上っていた。

それにも増して、往復する輸送用トラックを中心とする補給部隊そのものが消費するガソリンの量が、自軍の



第1次トブルク防衛戦ではドイツ軍を押しもどしたイギリス装甲師団であったが、今回はあっけなくドイツ軍の前に敗退した



トブルク攻略の戦功によりロンメルは元帥に昇格した

2コ機甲師団および1コ自動車化師団が戦場において消費するガソリンの量に匹敵するという厄介な事実が、問題をより一層複雑にしていた。

よく興味本位の戦争映画や、また、一部イギリス軍びいきの歴史家やジャーナリストが、文献等で誇大に喧伝している長距離砂漠挺身隊によるロンメルの補給線への破壊工作の影響力が大きかった等ということは単なる想

像の産物に過ぎず、現実的には長距離砂漠挺身隊がドイツ軍に対してコマンド作戦を実施した場合、ロンメル司令部襲撃事件、トブルク港奇襲攻撃作戦等いずれも常に大失敗に終わっており、多大な犠牲の割にはドイツ軍にほとんど損害を与えることができなかった事実が総てを証明している。

従って、ロンメルの抱えていた補給の問題は、トリポリより東に適宜に揚陸できる港湾がなかったことに問題が起因していたのである。

敵も、とうぜんこうした問題を抱えていたが、彼らはカイロからトブルク東方約10kmの地点にあるベルハメドに至る間に鉄道を敷設することにより、事態をはるかに改善していた。

しかし、ドイツ軍およびイタリア軍総司令部においては、鉄道敷設に要する膨大な鉄資源や労力を供給することができず、この問題に本気で取り組むことを回避した結果、ロンメルの戦闘行動力そのものを脆弱化させる結果となったのである。

✦ハーキュリーズ作戦の挫折

しかし、こうした問題も、マルタ島そのものを攻略すれば、船舶輸送に重大な支障をきたすことなく、トブルク港を利用して一挙に輸送問題を解決できることは紛れもない事実であった。

幅広い戦略的視野という才能では、ロンメルよりも優れていたケッセルリングは、まずマルタ島を攻略することにより確固たる補給線を確保・設定のうえ、安定的かつ継続的な補給の維持によるエジプト進攻作戦という正

イギリス軍から捕獲したジープもアフリカ軍団の貴重な足となった→



トブルクを陥した後アフリカ軍団は休むことなくカイロ、スエズへの進撃を計画した←



非力ではあったがイタリア軍もトブルク攻略に貢献した

攻法でものを考えていた。

一方ロンメルは、先に述べたようなイギリス軍の環境、そして自軍においてはソ連進攻作戦に重点が置かれている現在、決してこれ以上の兵力増強が望めないことから、時が経過するほど情勢が敵に有利に傾くことがわかっていった。

そのような状況から、一時的にせよトブルクの失陥によって動揺している敵の心理的状況を利用し、さらに増援によって敵の戦力が回復する前に一挙に敵の中枢部、すなわちカイロおよびスエズ運河を攻略することにより、中東の全イギリス軍戦力を撃滅すること以外に勝機がないことを確信していた。

21日にヒトラーの元へ届いたイタリア軍参謀総長ウーゴ・カヴァレロ大將からの書簡では、ケッセルリングの考えと同様に、補給問題の早急な改善とマルタ島攻略の重要性について注意を喚起していた。しかしベルントが持参したロンメルからヒトラーに宛てた書簡が同日ヒトラーの下に届くと、その内容はトブルク攻略により莫大な勝利品が手に入る、カイロ進撃に充分に間に合う分量のガソリン・飲料水・食糧が供給可能であるため、直ちにエジプト進攻の許可を求める、というものだった。

同日早速、ヒトラーはムッソリーニに対して、「ロンメルの勝利は、アフリカ戦における転機であり、勝利の女神はただ一度指揮官のもとへ近づくのみである」との





指揮、連絡に多用されたSdkfz.263無線装甲車。高度な機構を採用したため北アフリカでは整備に手間取ることになる

電報を打電し、ロンメルのエジプト進攻作戦に対する許可を促した。

実際のところ、ヒトラーとしては、ハーキュリーズ作戦は、イタリア軍のフォルゴレ空挺師団を中心としたイタリア軍主導の作戦であるとはいえ、結局ドイツ軍の降下猟兵師団が中心的役割を担うことは目に見えていたことから、マルタ島攻略作戦には気乗り薄であった。

さらに、先のクレタ島攻略作戦の例から判断しても、枢軸側の海軍戦力が期待できず、また、ドイツ降下猟兵軍総監クルト・シュトゥーデント空軍上級大將がクレタ作戦のようなずさんな作戦計画を立案することにより、選り抜きの精鋭である降下猟兵を無駄死にさせるおそれ強いと結論を下し、ついにハーキュリーズ作戦を無期延期とした。

＋目標はスエズ

マルサ・マトルー戦における イギリス連邦軍の編成

第8軍	第2南アフリカ師団
第10軍団	第4南アフリカ旅団
第1装甲師団	第6南アフリカ旅団
第4装甲旅団	第5インド歩兵師団
第23装甲旅団	第25インド歩兵旅団
第50歩兵旅団	第29インド歩兵旅団
第151歩兵旅団	第7臼砲旅団
第6オーストラリア師団	

22日のドイツは、国全体が北アフリカでの新たな勝利に酔いしれていた。

新しく完成したドイツ国内の橋がロンメルにあやかって、ロンメル橋と命名され、ウィーナー・ノイシュタットのロンメルの自宅は、祝辞や花束で一杯となっていた。

同日晩のラジオは、総統大本営特別発表としてロンメルの元帥昇進の放送を行っていた。

50歳にして陸軍元帥に昇進した者は、プロイセン・ドイツ陸軍史上初の快挙であった。もっとも、元帥全体での年齢記録という面では、国家元帥のヘルマン・ゲーリングと48歳で空軍元帥となったエアハルト・ミルヒに次いで3番目の記録であった。

ロンメルは、同日午後には、第15機甲師団および第21機甲師団に対してエジプトへの進攻を命令していた。午後7時30分には、両師団は国境線付近の敵陣地を迂回するため南方に向かって進撃を開始した。

23日には、第90軽機械化師団およびイタリア第20機械化軍団に対して、国境を突破してエジプトへ進撃するよう命じたが、翌24日午後6時、イギリス空軍のA-20ボストン軽爆撃機15機によりアフリカ軍団は初めて爆撃を受け、ロンメルも間一髪ところで爆撃を免れる有り様であった。

原因は、地上部隊のあまりの急進撃に対して、空軍の飛行場の設定が間に合わず、航空支援を実施できる状態になかったことであった。

25日朝から敵の爆撃機の数はいくつも増え、アフリカ軍団も同日だけで8回も爆撃を受け、翌26日には、爆撃は激し

さを増し、イタリア第20機械化軍団長バルダッサーレ中将をふくむイタリア第20機械化軍団司令部は爆撃により壊滅してしまった。

26日、ケッセルリングおよびカヴァレロ、アフリカ派遣イタリア軍総司令官エットーレ・ヴァスティコ元帥が、心配のあまり今後の作戦について討議するためロンメルのもとへやってきた。ロンメルは、もし機甲軍が今日、敵陣地の突破に成功したならば、30日にはアレクサンドリアに入城すると楽観的見通しを述べた。

29日の早朝、メルサ・マトルーの港を攻略した時点で、捕虜にした敵の数は2000名と意外に少なく、ロンメルは、敵が急速にアレクサンドリアへ撤退しつつあるものと判断した。実際には、オーキンレックがリッチーを罷免し、自ら第8軍の指揮をとり、エル・アラメインにおいて大規模な反撃作戦の準備を整えていたのである。

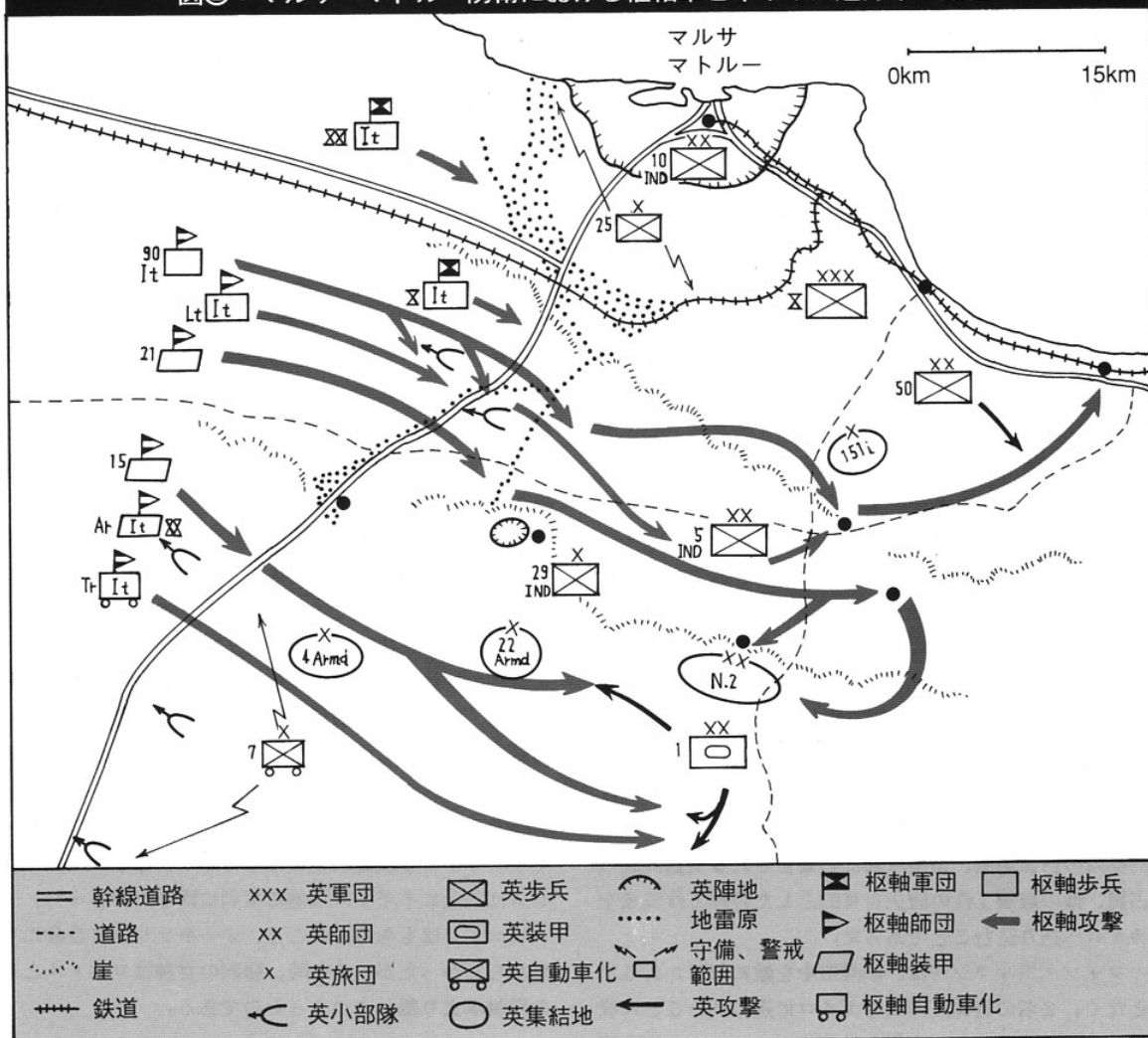
ロンメルは依然として楽観的であったが、機甲軍は実際のところ体力的に限界に達していた。30日には、前進するドイツ軍歩兵部隊の将兵達は真っ昼間から倒れたまま眠ってしまう者が続出し、イタリア第20機械化軍団は、これまでの敵の航空攻撃により、指揮下の戦車が15輦に減少している有り様であった。

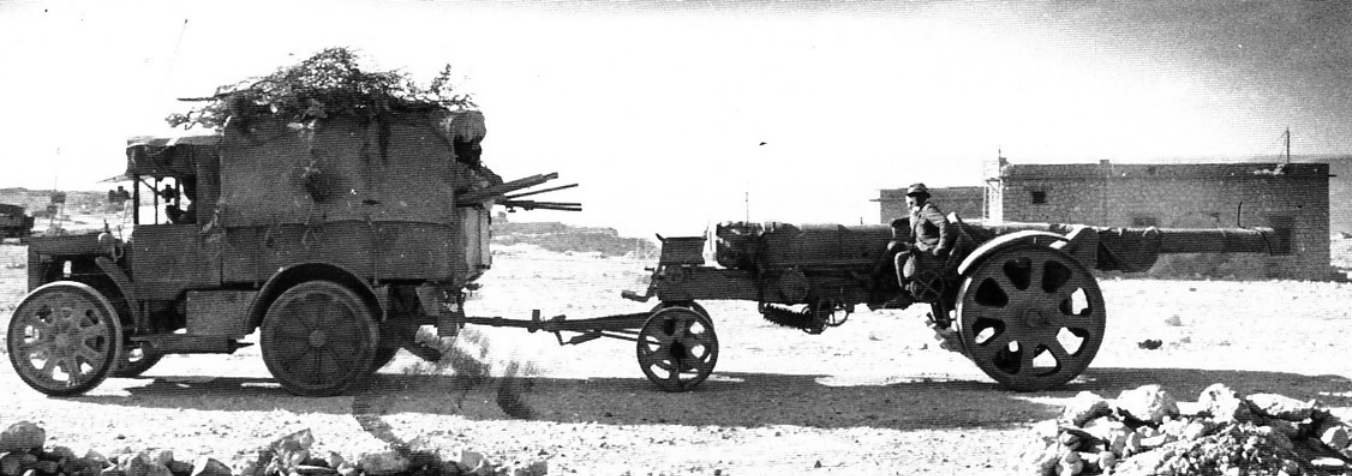
ロンメルも進撃の途上、彼の乗用車が2回も爆撃を受け、敵の航空攻撃が激しさを増してきたことは認めたが、午後には指揮下機甲軍の各将官を呼び集め、翌日7月1日午前3時に総攻撃を開始、目標はスエズである旨、命令した。

＋ロンメルの名声

この会議の最中にも敵の爆撃は激しさを増し、急いで会議を打ち切らざるを得ない状況になっていた。今や砂

図②：マルサ・マトルー防衛における枢軸軍とイギリス連邦軍の配置





15~20cm級の大口徑砲を牽引するブレダ32重牽引車

漠の戦いの振り子は止まり、アフリカ機甲軍は攻撃の勢いを失っていた。

それでもロンメルとその軍は、アレクサンドリアから160kmの地点に達していた。イギリス中東方面軍総司令部は、ロンメルがエジプトを攻略することをすでに覚悟しており、オーキンレックは、ドイツ軍進攻があった場合に備えて、放送・通信施設、燃料関係施設、輸送施設、電力施設等の破壊準備を命じていた。

そして、アレクサンドリアから避難してくる車でカイロ市内の主要道路はひしめいており、イギリス領事館の前は、パレスチナへの入国スタンプを旅券に押してもらう人々が長蛇の列を作っていた。イギリス大使館では、膨大な重要文書類が多数焼却されつつあり、カイロ駐留のアメリカ軍部隊はソマリランドへ避難し始めていた。イギリス軍でさえも、半ば不安と諦めの気持ちを持っていたが、このような事態は、ロンメルの名声が一歩上がった結果であった。

ドイツ国防軍諜報部長ヴィルヘルム・カナリス海軍大將は、ロンメルのエジプト進攻作戦の側面支援として、ニコラウス・リッター空軍少佐を長とした、エジプトにおける対イギリス破壊工作を検討させていた。

この作戦の実地部隊指揮官は、とくに有能で大胆な冒険家が要求され、この結果、元オーストリア・ハンガリー陸軍の大尉で、砂漠の専門家であり、長年エジプト政府地図作成局測量課に勤務し、エジプト政府に多くの友人を持つ、国防軍諜報部諜報第1課所属の伯爵ラスロー・フォン・アルマシー空軍少佐が任命された。

この作戦は、コンドル作戦というコードネームが付けられ、ナイル・デルタ地帯における重要な戦略的・経済的拠点の占領準備、奇襲攻撃に必要とされる交通施設の占拠、敵の破壊工作の防止を目的とした特殊工作部隊をカイロへ送り込むことであった。

フォン・アルマシーは、砂漠の中を敵に気付かれることなく、2名の特殊工作員をカイロに送り込むことに成功した。送り込まれた諜報部員達は、ロンメルの司令部

宛てに、カイロに戒厳令が施行され、非常事態宣言が発せられた旨を報告してきた。

一方、北アフリカより遙かに離れたロンドンでは、イギリス戦時内閣首相ウィンストン・チャーチルが、首相の地位に止まろうとして議会において必死の戦いを演じていた。

議会では、チャーチルは論争という論争に勝ってきたが、戦闘という戦闘にはすべて敗れているとの批判が巻き起こり、チャーチル自身の所属する保守党議員の中から、彼とその戦争指導に対する不信任の動議が提出されている状態であった。

7月2日、議会においてチャーチルに対する攻撃は、一層激しさを増していたが、チャーチルは、北アフリカにおける一連の災厄は、オーキンレック、リッチー、クロッパーを始めとする各級指揮官が無能である旨の演説を行ない、さらに、ロンメルが極めてすぐれた軍事的天才であることが最大の原因であると、3度、敵軍の司令官を賞賛していた。

イギリス議会において、チャーチルに対する不信任決議案の票決のため、議員達が投票を行ないつつある間、北アフリカでは、敵の航空攻撃により、アフリカ機甲軍は、ドイツ軍戦車55輛、イタリア軍戦車30輛に激減しており、やっとの思いでエル・アラメインのイギリス軍防衛陣地前面に到達したばかりであった。

1日の午前3時に実施された第90軽機械化師団による攻撃は、敵の激しい砲撃により阻止されており、イギリス軍の砲撃は、北アフリカにおいてかつて一度も経験したことない火砲の量であることは一目瞭然であった。

敵のこの攻撃により、ドイツ軍戦車はさらに37輛に減ってイタリア軍は壊走状態になっており、今や兵力のバランスは完全にイギリス軍側に有利に傾きつつあった。

ロンドンはもちろんのこと、オーキンレック自身にもわからなかったが、この時、勝利の女神はロンメルとその枢軸軍より離れつつあったのである。